

2019年の回顧と新年の展望

～ 2019年の回顧 ～

国内景気～回復の動きは鈍化

2019年の国内景気を振り返りますと、内需に底堅さがみられた一方、米中貿易摩擦などによる外需の落ち込みに伴い、輸出・生産が減少したことから、回復の動きは鈍化しました。

項目別にみますと、個人消費は、おおむね底堅く推移しました。背景としては、有効求人倍率が高水準にあり、大企業を中心に賃上げの動きが続くなど雇用・所得環境が引き続き良好であることなどがあります。ただし、10月の消費税増税は、消費マインドの下押し要因となりました。

設備投資は、世界経済の減速に伴い先行きの不透明感が増したことから、年央にかけて慎重姿勢がみられたものの、年後半には情報通信分野などで持ち直しの兆しもみられました。また、公共投資は前年を上回る水準で推移しました。

生産は、通商問題や各国の成長率の低下、半導体産業の生産調整などにより外需が伸び悩んだことに加え、自然災害による被害の影響もあり、減産傾向が広がりました。

県内景気～緩やかな回復の動きに足踏み感

県内景気を振り返りますと、本県の主力産業である機械工業を中心に減産傾向が広がったほか、個人消費や設備投資も力強さを欠くなど、緩やかな回復の動きに足踏み感が窺われました。

項目別にみますと、個人消費は、良好な雇用・所得環境を背景に底堅く推移していましたが、長雨や台風など自然災害の影響もあり、年央以降力強さを欠きました。なお、消費税増税前の駆け込みで乗用車や家電品、高額品など幅広い品目に好調な動きがみられた一方、その反動減の影響は足元でも続いています。

設備投資は、非製造業では人手不足を背景とした合理化・省力化投資を中心に比較的堅調に推移した一方、海外経済の減速等の影響で受注・生産が落ち込んだ製造業では、前年までの好況に基づいた投資計画を先送り・凍結するなど、慎重な動きが強まりました。なお、公共投資は前年を下回る動きが続いた一方、住宅投資は持家、貸家とも一進一退の推移となりました。

生産は、本県の主力産業である機械工業が、前年を下回る水準で推移しました。米中貿易摩擦等を背景に半導体製造装置や工作機械などが減少傾向で推移したほか、年央から年後半にかけては輸送関連や産業用機械など幅広い品目にも減産の動きが広がりました。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業は、納入先や取扱商品によりばらつきがみられましたが、全体としては厳しい局面が続きました。国内需要の伸びが期待し難いなかで、海外需要の取り込みに注力する

動きも広がっています。

なお、観光関連をみますと、外国人観光客の入込みが過去最高水準で推移しました。中国や台湾、香港など中華圏からの観光客が引き続き多くを占めています。一方、国内観光客も、年央までは堅調に推移していましたが、夏場以降は天候不順等の影響もあり、増勢が鈍化しました。

～ 新年の展望 ～

国内景気～緩やかな回復基調を辿る

わが国では56年ぶり2度目の夏季大会開催となる第32回オリンピック競技大会(2020/東京)、および東京2020パラリンピック競技大会は、スポーツを中心に社会や文化、経済に広範かつ巨大なインパクトを与えることが期待されます。

こうしたオリンピックイヤーの高揚感が国内を覆う2020年の国内景気は、緩やかな回復基調を辿るものとみられます。個人消費が良好な雇用・所得環境に支えられ底堅く推移するほか、海外経済が成長ペースを回復するに連れて生産・投資活動も持ち直していくと見込まれます。ただし、米中貿易摩擦の長期化等の政治・経済問題は世界経済の下振れ要因となる可能性があるため、注意する必要があります。

項目別にみますと、個人消費は、全体としては底堅く推移するものとみられます。増税対策効果の剥落や将来不安等を背景に消費マインドが減退すると考えられますが、労働需要・賃金水準の高止まりが消費を後押しする構図は変わらず、東京オリンピック・パラリンピックによる盛り上がりも期待されます。

設備投資は、外需の伸び悩みを背景に当面は慎重姿勢が続くものの、国内の生産年齢人口の減少を見据えた合理化・省力化投資の必要性は産業界に広く共有されるものとみられ、緩やかに持ち直していくとみられます。

生産は、通商問題と在庫調整が続くなかで、当面は機械工業を中心に伸び悩み展開が想定されます。ただし、2020年に予定されている第5世代移動通信システム(5G)の商用化は、通信機器の需要拡大に加え、自動車の自動運転などの応用分野への波及効果が見込まれることから、中長期的な経済成長の端緒となることが期待されます。

県内景気～緩やかな回復に向かう

県内景気は、基本的には国内と同様の動きを辿ると考えられます。生産面で機械工業が増勢に転じるほか、個人消費も改善傾向で推移することが見込まれることから、全体としては緩やかな回復に向かうとみられます。

項目別にみますと、個人消費は、消費税増税の影響等で消費マインドが弱含んでいるものの、堅調な雇用・所得環境に支えられ、緩やかに持ち直していくとみられます。当面は、年前半の企業業績と夏季給与の支給状況に注目していく必要があります。

設備投資は、力強さを欠く動きが続くとみられます。山梨中央銀行が実施した

「県内企業経営動向調査」の2019年度下期(2019年10月～2020年3月)の設備投資計画においては実施予定率、投資予定額ともに慎重な姿勢が窺われます。

生産について、当面は機械工業で足踏みが続くものとみられます。ただし、世界各国で5G商用化の進展が見込まれるなか、シリコンサイクル底打ちの動きが県内関連企業へ波及することで、全体として回復に向かうことが期待されます。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業については、人口減少等による国内需要の伸び悩み、輸入品との競合激化などから、総じて厳しい局面が続くと思われまふ。ただし、生産技術やデザイン等で新たな知見を取り入れ、競争力のある高級品や顧客ニーズを捉えた自社ブランド製品の開発などに注力することで、新たな需要を取り込むチャンスは広がるものと考えられます。

観光関連は、首都圏に近い優位性を生かして、東京オリンピック・パラリンピックで多数来日する外国人旅行者や競技関係者を取り込むことで、入込客数の更なる増加が見込まれます。また、2020年中に予定されている中部横断自動車道の南部区間全線開通により、東海・中京方面からの観光客増加が期待されます。

～ 子(ネズミ)の話 ～

2020年は、子(鼠)年です。鼠はリスなどと同類のげっ歯類に属し、アニメのキャラクターやペットとしても大人気の馴染み深い動物ですが、上下のあごに各一對の鋭い門歯を持っています。この門歯は永久に伸び続け、伸びる長さは一週間で約2.5mm、一年間で10cm以上になります。もし鼠が何もかじらずにいと、門歯が伸びすぎて、口が塞がってしまうことから、鼠は固いものをかじって門歯の伸びすぎを防ぐという習性を持っています。そのため、柱や壁等に穴をあけ、思わぬ災害の原因を作ったりします。また、ペストなどの伝染病を媒介する動物としても知られており、「枕草子」では「きたなげなる物、鼠の住家、つとめて手おそく洗う人」、「尤草子(もつともものそうし)」でも「悪し者、物をかじる鼠、花を散らす鳥」と記されており、鼠は汚らしい厄介な悪者として扱われています。

一方、鼠算などと言われるように、鼠は繁殖力が旺盛な動物です。このため、「妊娠中に鼠の穴をふさぐと、難産する」と伝えている地方がありますが、多産で繁殖力の強い鼠にあやかた安産と子孫繁栄を祈るところから出たと考えられています。また、「鼠が家にいと繁盛する」、「鼠がいなくなれば何か悪いことが起きる」、「鼠が木登りをすと水害がある」、「鼠が逃げ出すのを見たら船には乗るな」といった類の話も広く伝わっています。さらに、鼠は「寝ず身」と書かれることもあり、寝ずに働く＝商売繁盛を司る動物でもあります。このように、鼠は汚いもの、害をなすものであると同時に、不思議な予知能力を有し、家の繁栄や人の幸せを掌理する力を持つものとみなされていたようです。

また、鼠には「神の救済者」であり、「神の使者」とする考え方があります。「古事記」の神話に鼠が大国主神(オオクニヌシノカミ)を救う話がありますが、この話は次のように伝えられています。「須佐之男命(スサノヲ)が大国主神の能力を試そうとして、大国主神を広い野原に行かせて野原に火を放った。火はたちまち燃え広がり、大国主神は逃げ場を失った。このとき一匹の鼠が現れて、大国主

神に『この下に穴がある』と教えた。これを聞いた大国主神は、穴の底に身を伏せて火が収まるのを待って助かった」というものです。後に大国主神は、七福神の大黒天と混同される形で信仰され、鼠は「神の使者」として、大黒天のまわりで遊ぶ姿が描かれるようになりました。鼠は人に危害を与える困った動物ですが、同時に、「神の使者」として、「五穀豊穰」や「実り」、「財力」を象徴するありがたい存在であるとも考えられていたわけです。

わが国の子年の歴史を振り返りますと、長岡京遷都（784）、保元の乱（1156）、安土城築城（1576）、関が原の戦い（1600）、シーボルト事件（1828）、二・二六事件（1936）、帝銀事件（1948）、新安保条約調印（1960）、沖縄本土復帰、連合赤軍事件（1972）、グリコ・森永事件（1984）、水俣病訴訟終結（1996）、リーマン・ショック（2008）などの出来事がありました。

また、山梨県関連では、富士箱根国立公園指定（1936）、第1回県芸術祭（1948）、市立都留短大が4年制の都留文科大学に昇格（1960）、昇仙峡グリーンライン開通（1972）、「清里の森」起工式（1984）、地方病の流行終息宣言（1996）、「富士・東部小児初期救急医療センター」開設、富士山ナンバーの交付開始（2008）などの出来事がみられました。

子年生まれの名人としては、赤川次郎、浅野ゆう子、梅原龍三郎、桂文珍、木村拓哉、クレード・モネ、笹野高史、渋谷栄一、白井健三、高梨沙羅、高橋尚子、田中圭、寺田心、長嶋茂雄、野口英世、速水もこみち、双葉山、山崎豊子、レフ・トルストイなどがいます。

陰陽五行によると、2020年は「庚子（かのえ・ね）」にあたります。「庚」とは草木としての成長が止まり、花を咲かせて種子を残す準備に入る状態を意味し、「子」とは種子の中で新しい生命を育てている状態を意味します。このことから、「庚子」の年は、「新たな芽吹きと繁栄の始まり」とされており、過去の成果から引き継ぐべきものを維持しつつ、新たな環境や局面に向けて体制を整えていくと良いといわれています。

社会を取り巻く環境は、年を追うごとに複雑さと変化のスピードを増しています。このような時代のなかでは、過去の良き伝統、体制を守りつつ、未来に向かい「進化」、「革新」を図っていくことが必要と思われます。2020年は、結婚、新築、新規事業、開店など新しく何かを始めるには、絶好の年回りです。折しも夏には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。日々「進化」し続ける日本人選手の活躍を期待しつつ、自身もさらなる飛躍が出来る1年にしたいものです。

※子（ねずみ）の話は、十二支の民俗誌（八坂書房）などから当社で作成

2020年1月
山梨中銀経営コンサルティング株式会社